

大迦葉物語

——『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第63章和訳——

引 田 弘 道

大迦葉物語は迦葉族出身のピッパラーヤナが妻バドラーを娶りながら、淫欲を起すことなく梵行を實踐し、終に出家して「多くの息子」という名のチェーティヤの根元にいるカーシュヤバ仏に近づき、法と戒律とを与えられ、清浄な悟りを得た、という内容である。大迦葉は仏教教団で釈尊の法を継いだ高弟として有名な人物であるが、出家前はどのような生活を送っていたのか、なぜ出家したのかを詳しく説いたものが、今回の物語である。本物語には以下の類似のものが認められる。

類似の物語

パーリ・テキストに関しては、[赤沼：369]と[Malalasekera: 476-478]に詳しく述べられている。[Malalasekera: 476-478]によれば、マガダ国のMahātitha村のバラモン、カピラ(Kapila)とその妻スマナーデーヴィー(Sumanādevī)との間に生まれたピッパッリ(Pippali)が出家して大迦葉になったとされる。彼は当初結婚に全く気がなかったが、両親の勧めにより彼が作った像に匹敵するサーガラ(Sāgala)のバッドー・カーピラーニー(Bhaddā Kāpilānī)と結婚した。ただ二人とも世の無常を感じて出家した。この内容はThagA, pp. 129-135に則ったものである。なお、Mahākassapa長老とバッドー・カーピラーニーはAp, pp. 33-35, 578-584にも記されている。

『有部苾芻尼』：『根本説一切有部苾芻尼毘奈耶』(大正23, 908b-911c)。摩揭陀国の尼拘律城の息子、畢鉢羅は劫比羅城のバラモン娘、妙賢を妻とし、ともども出家する。広厳城の多子塔のもとで仏を見、弟子となる。

『因果経』：『過去現在因果経』(大正3, 653a-b)。迦葉とその妻はともに欲想なく、出家する。迦葉は竹園にいる世尊の下に行き弟子となり、終に阿羅漢果を得る。

『釈迦氏譜』：『釈迦氏譜』(大正50, 93b)。憍羅国にいるバラモン、迦葉は三十二相あり、諸々の書論に通じる。妻を娶ったが、二人とも世間の欲なく、出家。竹林にいる仏より説法を受け、阿羅漢となる。天も人も彼を重んじたから、「大」を名前に冠する。

『増一』：『増一阿含経』(大正2, 647b-c)。羅閱城内の大金持ち、迦毘羅の息子に「比波羅耶檀那」がいた。彼の妻は婆陀。彼は妻を捨てて出家、阿羅漢となり、常に頭陀行

を修する。彼が頭陀第一の大迦葉である。

『大迦葉』：『仏説大迦葉本経』（大正14, 760a-b）。王舎城にいる大金持ちの尼拘類の息子、畢揆学志は、家の財産と美しい妻を捨てて出家。多子神祠の叢樹のいる仏陀のもとに赴き、教えを受ける。

『毘尼母経』：『毘尼母経』（大正24, 803c-804b）。王舎城の尼駒陀バラモンの息子、畢波羅延は、あらゆる経書に通達していた。彼の妻の跋陀ともども出家。多子塔のもとで仏を見、弟子となり、終に阿羅漢果を得る。

『仏所行讃』：『仏所行讃』（大正4, 33c-34a）。迦葉とその賢婦は出家し、解脱道を求める。多子塔にて釈迦文に遭い、弟子となる。彼は大きな徳あったため、「大迦葉」と呼ばれる。

『仏本行経』：『仏本行経』（大正4, 81c）。葉樹生という名の大家子、出家し、多子野沢において仏の弟子となり、仏の深妙の法を聞いて、果証を得る。

『本行集経』：『仏本行集経』（大正3, 861c-869c）。摩伽陀国の王舎城に摩訶娑陀羅という村がある。その村にとっても富裕なバラモン、尼拘慮陀羯波がいた。彼の妻は一本の畢鉢羅の木下で子供を産み落とした。その童子はこの木に因んで「畢鉢羅耶那」といった。彼は梵行に関心があったが、父母の勧めで、迦羅毘迦村の色迦毘羅バラモンの娘、「跋陀羅迦卑梨耶」を娶る。二人とも出家して、多子塔の下で仏の弟子となり、悟る。過去世の物語。

概 略

0. 愛欲の対象に興味の無い者への賛嘆 (1)

1. バラモンの子ピッパラーヤナの誕生

マガダの町に富で有名な、ニャグロードガルバという名のバラモンがいた。彼は大家の家柄の出自であった。彼の妻、スルーパーは、家の遊園で楽しんでいるとき、ピッパラー樹の下で、太陽のような男の子を産んだ。その息子が生まれた途端、その木から名声で輝く天上の衣服が現れた。その木に因んだ名前の息子、ピッパラーヤナは、学問や技芸の知恵をつけ、美しさを具えて成長した。(2-5)

2. 結婚に気の進まない息子と父の心配

息子は結婚に気が進まなかった。彼は感覚器官の対象を嫌悪し、分別力と清澄な心をもっていた。父は家系の断絶を恐れて何度も結婚するよう懇請したが、息子は結婚という束縛は好まない、愛欲を望んでいない、梵行を望むと応えた。彼にとって結婚とは心が迷った男の行う愚行だとする。(6-10)

3. 息子の提案、即ち黄金の乙女の人形に相応しい乙女の捜索

強く結婚を勧める父と母に、巧みな職人らによって作られた黄金製の乙女の像を手にとると、この人形と等しいくらい美しい姿をした乙女が手に入るならば、結婚しよう

と、提案する。そのような乙女は天上でも得がたいと考えて、バラモンは気落ちするが、彼の友、バラモンのチャトゥラカは、努力さえすれば何とかなる事に悲しむべきではない、自分が黄金の輝きを持つ乙女を発見しようと約束する。彼は黄金の乙女の像を手にもち、遠方へ出かけた。そして、神の印ある日傘や花輪・衣服・飾りを手にもち、それらは乙女によって供養されるべきものだといいふらし、町や村の道端に、それらの供養のためにやって来た乙女たちの中から相応しい女性を探す。(11-19)

4. バドラーとの結婚

ヴァイシャーリーの町で、カピラバラモンの娘、バドラーという名前の、黄金の乙女にも増して輝く乙女を発見。ただ彼女は結婚に興味がなく、厭世心や分別心があった。乙女を乞われた家族は黄金の婚資と茶色の牛を求める。「カーシャパのゴートラに生まれたニャグロードカルパはその家系の良さで有名であるが、それだけでは不足である。娘は財を婚資として要求してから与えられるものだ。というのも彼女が貧乏で溜め息をついていると、父の心を悲しみで焼いてしまう。争いに執着する妻、貧乏な夫に娶られた娘、災難に打ちのめされた息子、彼らは心にささった熱せられた針である。」これが乙女の父の言い分であった。

チャトゥラカは承諾すると、少年の父の許へ帰り、黄金の色をした美しい乙女が見つかったと報告する。父は喜びで一杯になった。その娘が梵行を求めていると聞くと、ピッパラーヤナは、自らも乞食者の服装をして彼女の家に向かい、賓客の厚遇を受け、彼女に自身も梵行を求めているので、同じ女性を探し求めていたと言う。彼自身も結婚に気がないので、幸運にも肉体の交わりは二人にはないと、彼女を説得する。

彼女も、この結婚は寂静と肉体の抑制とがあるから適切であると彼の申し出を受ける。二人の結婚の祝いは、大変豪華絢爛さをもって施行されたが、二人は梵行を捨てなかったので、肉体の交わりは二人にとって全く興味をひかなかった。(20-36)

5. 梵行を実践する夫婦と黒蛇

二人は肉体の抑制を習慣としていたので、順番に一人が眠っていると、もう一人は立って夜通し目覚めて、互いの肌に触れないようにした。ある時、バドラーが眠っているとき、ピッパラーヤナは、寝台の辺りに黒い蛇を見た。両脇にだらりと垂れた彼女の蔓のような腕を、彼は衣服で持ち上げ、脇子の端をもって蛇から防いだ。

突然腕が動いてびっくりした彼女は、夫が性の衝動に駆られたのだと勘違いをして、彼を責める。夫は黒蛇から彼女の腕を守ったのだと説明する。これを聞くと、彼女は疑いを捨てて、真実を守るのを習慣とする夫の心が愛欲で汚されていないことを賞賛する。(37-48)

6. 油絞りの出来事による、バドラーの厭世心

ニャグロードカルパが妻を伴って三日間出かけた時、ピッパラーヤナは、多くの家の雑務という重荷を背負う。ある時、胡麻油を求めて雄牛たちが胡麻を搾るさい、バド

ラーは女奴隷たちを使用していた。彼女たちは胡麻を搾っていたが、壺のなかに多くの虫たちが落ちては沈んでいくのを見て、可愛そうに思っ互いに殺生の罪が彼女等にあるのか、それともそれを命じたバドラーにあるのか言い合う。これを寝室で聞いたバドラーは厭世心を抱く。(49-53)

7. 夫の出家

夫もまた家庭の雑事に疲れる。世俗の幸福は価値のないものであり、それを味わっていると、葦の葉のように苦痛を与える。年老いた牛が泥の中に沈むように、罪という泥のある家に、家の住人は沈む。このように考え、夫も出家を決意する。資材とともに家を他人に与えると、あらゆる希望や足かせ・束縛からのがれて出家する。(54-58)

8. 戒名マハーカーシュヤパ、カーシュヤパ仏のもとで悟りを得る

彼はカーシュヤパの種族の出であったので、マハーカーシュヤパ(大迦葉)という戒名になり、「多くの息子」という名のチェーティヤの根元にいるカーシュヤパ仏に近づき、法と戒律とを与えられ、清浄な悟りを得る。(59-60)

9. 妻も戒を受け、善根を得る

バドラーもまた戒を受け、功德が熟して善根を得る。(61)

10. マハーカーシュヤパの前世

如来はマハーカーシュヤパの前世を説く。飢饉のときカーシの町で、僅かな財産しかない男が、自らの食物をもってタガラシキン仏を供養。クリキ王は立派な輝く宝石が積み上げられたチャイトヤを建立、彼の息子は宝石や黄金で美しい日傘を立てかける。これらの二つの生の間に積んだ功德が大きく顕現して偉大な称号のカーシュヤパに生まれ、出家して善根の果報である光輝ある阿羅漢の状態となった。(62-65)

今回も伊藤正見氏と一緒に翻訳をした。

和 訳

愛欲の対象に興味の無い者への賛嘆

インドラ・ヴァーユ・ヴァルナ等の神々や、優れた仙人たちが、その為に興奮してしまう(vikriyām), その愛の神の悦楽が(smarasukham), その人にとっては、つまらないものである(trṇāyate),

そのような彼が、誰にとって驚愕の出来事(vismayāspadam)でないことがあるのか。

(1)⁽¹⁾

バラモンの子ピッパラーヤナの誕生

マガダの町の(Māgadhagrāme)小高い場所に、富で有名なバラモンがいた。(彼は)ニヤグローダカルパ(Nyagrodhakalpa)という名で⁽²⁾, 大家の家柄の出自で(mahāśālakula-udbhavaḥ)あった。(2)⁽³⁾

彼の妻はスルーパー (Surūpā) という名で、家の遊園で楽しんでいるとき、ピッパラ樹の (Pippalasya) 下で、太陽のような (arkābhaṃ) 男の子を産んだ。(3)

輝く黄金のような (-jāmbūnada-) 光ある、その息子が生まれた途端、その木から名声で輝く天上の衣服が現れた。(4)

ピッパラーヤナ (Pippalāyano) という名の⁽⁴⁾、蓮華のような目をした彼の息子は、学問や技芸の (vidyākālā-)⁽⁵⁾ 知恵をつけ (-kalitadhīr), 美しさを (śriyā) 具えて成長した。(5)

結婚に気の進まない息子と父の心配

彼は父によって懇請されていたが、いつも結婚に (vivāha-) 気が進まなかった。感覚器官の対象を嫌悪し、分別力と (viveka-) 清澄な心をもっていた。⁽⁶⁾ (6)

家系の断絶への恐れから (vaṃśaccheda-bhayāt), 父によって何度も (結婚するよう) 懇請されると⁽⁷⁾、彼は彼の (父) に言った。「結婚という束縛は (pāṇigraha-bandhanam) 私には好ましくありません。(7)

お父さん、私は愛欲を望んでいません (kāmakāmo)。私の意向は梵行に (brahmacarye) あります⁽⁸⁾。寂静や自立性を (śama-svācchāndyam) 捨ててしまえば、誰にとって生存の束縛が (bhavabandhanam) 好ましいものでありましょう。(8)

火供の煙によっては、涙が絶えずこぼれることが最初の現れです (pravṛtīh)。真実の結び目は (satyagrāhīr) 災難のときにも等しく手を握ることによって (生じます)。

輪廻の命令や規則が (-ājñācamaya-) 発動するとき、花輪の糸を結ぶ (結婚) があるのです。迷妄が添加することによって (mohārohana-) 心が傷つけられた人にとってのみ、結婚は慶びの原因です。(9)⁽⁹⁾

踊りで (まき起きる) 風でそよぐ草のような若い乙女の媚態に合わせた、琵琶やフルートの音色を、結婚式のさいに、興奮した男たちは (protsāhitair) 聞こうともしないし、

花嫁がたわごとを話すことによって去勢された (男たちも) それらの (音色を) 必要としない。「あー、息子よ、何ということだ」という、父の涙につまり、むせて、やっとのことで話す言葉だけが聞こえます。」(10)⁽¹⁰⁾

息子の提案、即ち黄金の乙女の人形に相応しい乙女の捜索

強く (結婚を) 勧める父と母に、彼はこのように言い、

巧みな職人らによって作られた黄金製の乙女 (の像) を (hemakanyām) 手に取ると、(11)⁽¹¹⁾

(その像は) 輝きを注がれた好奇心が (kautukasya) 具現化した (黄色の) バナナの実の (kandalīm) のようであったが、家系が断絶するのではないかと (kulaviccheda-) 心配して苦しむ彼の (父に)、(彼は) 決然として再び言った。(12)

「この (黄金の乙女の人形) に等しく美しい姿をした乙女が手に入るならば、父よ、そ

うすれば私は貴方の言葉に従って (tvadgirā), 結婚式を (dārasaṅgraham) 行いましょう。」⁽¹²⁾ (13)

このような息子の言葉を聞くと、その(像)に等しい乙女は天上でも得がたいと考えて、バラモンは望みがなくなり、うつむいてしまった。⁽¹³⁾ (14)

チャトゥラカ (Caturaka-) という名前の友人のバラモンは⁽¹⁴⁾, その事の顛末を聞くと、喜びが無くなり、無活動となってしまい⁽¹⁵⁾, 悲しみに打ちのめされた彼に言った。(15) 「努力さえすれば何とか成就され得る対象に対して (prayatnamātrasādhye 'rthe) 貴方は悲しむべきではありません。他ならぬこの私が、黄金の輝きを持つ乙女を発見しに行きましょう。」 (16)

このようにとしい友を力づけると (kṛtvā dhairyam), 賢明なバラモンは黄金の乙女(の像)を手にもち、遠方へ出かけた。⁽¹⁶⁾ (17)

神の印ある (devatālāñchana-) 日傘や花輪・衣服・飾りを手にもつと、(その黄金の像の) 乙女によって供養されるべきものだと言いつらしながら⁽¹⁷⁾, あらゆる方向を歩き回った。(18)

町や村の道端に、その(像の) 供養のためにやって来た乙女たちを見ても、彼はいつもその(黄金の像に) 匹敵する(乙女を) 得ることはなかった。(19)

バドラーとの結婚

しばらくして、ある時、ヴァイシャーリーの町の (Vaiśālyām) カピラという (Kapilasya) バラモンの娘で、バドラー (Bhadrā)⁽¹⁸⁾ という名前の、黄金の乙女(の像)にも増して輝く(乙女を) 見た。(20)

(ただ) その美しい婦人は結婚に興味がなく (vivāhavimukhīm), 厭世の気持や分別心があった (vairāgyavivekinām)⁽¹⁹⁾。(乙女を欲しいと) 言われた家族は (kathitānvayaḥ), 黄金の婚資 (hemaśulkām)⁽²⁰⁾ と茶色の牛を⁽²¹⁾ 求めた。(21)

乙女の父は彼に言った。「この世でカーシャパの (Kāśyape) 種族(ゴートラ) に生まれたニャグロードカルパの (Nyagrodhakalpasya) 良き家系は (satkulam), その家系の良きで有名です。(22)

しかしながら、娘は努力して財を(婚資として) 要求してから(嫁として) 与えられるものです。というも彼女が貧乏で溜め息をついていると、父の心を(悲しみに) 焼いてしまうからです。(23)

争いに執着する妻、貧乏な(夫) に娶られた娘、災難に打ちのめされた息子、(彼らは) 心に(ささった) 熱せられた針です。(24)

大海はヴィシュヌ神に (Puruṣottamāya) シュリー女神を (Śriyam) 与え、さらにバリの (Bali-) 請いによって彼(のヴィシュヌ神) がより小さい小人に (Vāmanataram) なったのを知ると、

今でもまだ水中の火の (-vaḍanānala-) 姿をした悲しみが(その身に) 付着して、溜め

息ばかりつきながら、激しい苦しみを捨て去ることはないです。(25)⁽²²⁾

ですから、財産を求めて、その(財産で)権勢が盛り上がっている人を (tadvibhavonnatim) 知ると、その良家の男に、実に財に依存した、良き徳性をもつ娘達を私どもは与えましょう。」(26)⁽²³⁾

以上のような娘の父や、彼の娘たちの言葉を聞くと、「分かりました。」と言って、バラモンは少年の父の許へ行った。(27)

「黄金の色をした美しい乙女が見つかりました。」という彼の言葉を聞くや否や、ニャグローダカルパは喜びで一杯になった。(28)

その娘が梵行を (brahmacarya-) 求めているのを聞くと、ピッパラーヤナは、自らも乞食者の (arthi-) 服装をして、ゆっくりと彼女の家に向かった。⁽²⁴⁾(29)

賓客の厚遇を (-atithisatkārah) 受けると⁽²⁵⁾、賢明な (kṛtī) 彼はそこにいる彼女を見て、(彼女が) 梵行を求めているのを知ると、望みが満たされて (pūrṇamanorathah) 言った。(30)

「淑女よ (kalyāṇi), 私は梵行を求めているバラモン、ピッパラーヤナと申します。その(梵行の) ために、このバラモン (の私) は、汝を苦勞して探し求めました。(31)

私は父にとってもせつつかれましたが、結婚には (vivāha-) その気がありません。バドラーよ (bhadre), 汝もまた同じ気持ちです。幸運にも肉体の交わりは (samāgamah) 同じように (二人にはありません。)」⁽²⁶⁾(32)

以上の彼の言葉を聞くと、彼女は喜んで彼に言った。「この結婚には、寂静と肉体の抑制とがありますから (śamasamāyāt), 私達二人に何ら矛盾したものではありません。」(33)

すると、正しく沸き起こった喜びと活力とに (-prahaṣotsāha-) 満たされて、彼は自身の家に帰ると、父の申し出に (vākyaṃ) 同意した。(34)

カピラも (Kapilo) また、無限の富の隆盛を (-dhanodayam) 求めながら、立派な宝石で飾られた娘を彼に与えた。(35)

二人の結婚の祝いは (pariṇayotsave) 大変な豪華絢爛さをもって施行されたが、二人は梵行を捨てなかつたので⁽²⁷⁾、肉体の交わりは (samāgamah) (二人にとって) 全く興味をひかなかつた。(36)

梵行を実践する夫婦と黒蛇

美形と若さが横溢してはいるが、二人は肉体の抑制を習慣としていたので (samāyamaśīlayoḥ), カーマ神の (Manobhuvah) 命令に従うことはなく、(この神の) 権勢はすたれてしまった。(37)

順番に一人が眠っていると (ekānidrāyām), もう一人は立って夜通し目覚めていた (jāgarty ekaḥ samutthitah)。このように (互いの) 肌に触れないために、二人は (順番に) 横になったり、立ったりを (śayanasthitim) 繰り返した。⁽²⁸⁾(38)

さて、ある時、バドラーが眠りで (nidrā-) 目を閉じていると、ピッパラーヤナは、寝台の辺りに黒い蛇を (kālavyalāṃ) 見た⁽²⁹⁾。(39)

そして、そ (の蛇) への恐れから、両脇にだらりと垂れた彼女の蔓のような腕を、彼は思いやりの心から、衣服で持ち上げ (utkṣipya), 払子の端をもって (蛇から彼女の腕を) 防御した。⁽³⁰⁾ (40)

突然腕が動いて恐れた彼女は、鹿のような目をし、胸を震わせ、胸飾りを動かして、夫に言った。(41)

「貴方様 (āryaputra), このような心の衝動が (citta-viplavaḥ) 生じたなんて、一体、貴方は真実を語る (satyavādinah) 誓いを (samayaḥ) 忘れてしまったのですか。(42)

貴方が心変わりをしたなんて (vikāryasya), どんな一連の恥さらしなことが (lajjavahā) (貴方に) 起こったのですか。王らは (bhūdhara) 満足の限度を (dhṛtimaryādām) 捨てますが、聖者は (捨て) ません。」(43)

このような彼女の言葉を聞くと、彼は微笑んで彼女に言った。「バドラーよ、夢の中でさえ、私の心には衝動は (viplavaḥ) ありません。(44)

しかしここに恐ろしい黒蛇が動いています。寝台からだらりと垂れた汝の腕を、私は (咬まれはしないかと) 恐れて守りました。」⁽³¹⁾ (45)

このような夫の言葉を聞くと、彼女は疑いを捨てて言った。「真実を守るのを習慣とする (satyaśīlasya) 貴方の考えが、愛欲で汚されていないことは、何と幸いなことでしょうか (diṣṭyā)。(46)

この蛇はみじめな聖者です⁽³²⁾。愛欲は蛇より⁽³³⁾大きな恐怖です。蛇は一つの身体を殺しますが、愛欲は百もの身体を殺します。⁽³⁴⁾ (47)

ですからこの心の衝動は (vikārah) 抑え込まなければなりません。」このように言うと、彼女は (話を) 止めた。ピッパラーヤナは彼女の肉体の抑制を (samyamam) 大変賞賛した。(48)

油絞りの出来事による、バドラーの厭世心

しばらくして、ニャグローダカルパが妻を伴って三日間出かけた時、彼 (のピッパラーヤナ) は、多くの家庭の資材について (-grhasaṃbhāra-) 心を砕くという重荷を (cintā-bhāram)⁽³⁵⁾ 背負った。(49)

ある時、胡麻油を求めて (tailapānāya), 雄牛たちが胡麻を搾っていると (tilapīḍane), 彼によって (胡麻絞りを) 任されたバドラーは女奴隷たち (paricārikāh) を使っていた。(50)

彼女たちは胡麻を搾っていたが、壺のなかに多くの虫たちが落ちては沈んでいくのを見て、可愛そうに思って互いに言い合った。(51)

「あー、多くの生き物を殺すことから、私達には罪があります。あるいは (彼女の) 命令で (girā) 行った、このすべての罪はバドラー様に帰するでしょう。」(52)

この(言葉)を聞くと、寝室に (antargrha-) いたバドラーは厭世心を (vairāgyam) 抱くようになった。⁽³⁶⁾まさにその瞬間、夫は(寝室に)入って、彼女にこっそりと言った。(53)

夫の出家

「バドラーよ、私は家庭の大荷物に (-mahābhāra-) 疲れてしまった。雄牛が耕作の苦しみで疲弊してしまうと、(その) 生気を奪うというような決まりには私はずっと耐えられない。⁽³⁷⁾ (54)

これらの豊富な幸福は (sukhasampadaḥ) 苦しみで終わるような、価値のないものである。(幸福は) 味わっていると、葦の葉のように (naḍasākhā) 苦痛を与える。(55) 煩悩という苔の生えた (leśasailajāleṣu), 罪という泥のある家に、家の住人は (veśminah) 沈んでいる。まるで年老いた牛が泥の中に (沈む) ように。(56)

だから私達二人がこの家庭の雑事を (grhasamārambhas) 捨てるのは適切なことだ。」このように言い、妻に同意されると、(彼は) 寂靜に向けて (śāntyai) 心を決めた。(57) 彼は(人的・物的) 資材とともに (saparicchadam) 家を、財を求める人たちに与えると、あらゆる希望や足かせ・束縛 (-āsāpāsabandhanah) からのがれて、出家した (nīścakrāma)。⁽³⁸⁾ (58)

戒名マハーカーシュヤパ、カーシュヤパ仏のもとで悟りを得る

さて、彼はカーシュヤパの種族の出であったので (Kāśyapagotravān)⁽³⁹⁾、マハーカーシュヤパという戒名に (Mahākāśyapatām) なり⁽⁴⁰⁾、その時の等正覚 (tatkālasamyaksambuddham)、カーシュヤパに (Kāśyapaṃ)⁽⁴¹⁾近づいた。(59)

「多くの息子」(Bahuputra) と呼ばれるチャイトヤの (caityasya)⁽⁴²⁾根元にいる彼の(仏)に近づき、彼によって法と戒律とを与えられると (taddatta-dharmavinayah)⁽⁴³⁾、清浄な悟りを (suddhāṃ bodhim) 得た。⁽⁴⁴⁾ (60)

妻も戒を受け、善根を得る

バドラーもまた、戒を受け (labdhavinayā)、世俗への嫌悪心に満ちた修行の道によって (vairāgyāviṣṭavartmanā)、まず功德が熟すことにより (punyaparīṇāmena)、輝く善根を (kuśalam) 得た。(61)

マハーカーシュヤパの前世

マハーカーシュヤパが神々によってさえ敬礼される程になったのを見た比丘たちによって、彼の功德について尋ねられた如来は (tathāgataḥ)、彼らに言った。(62)

「あらゆる食用の穀物が(熟すのを) やめてしまって、托鉢が (piṇḍapātre) 終わってしまった、より困難な時に、

カーシの町で (Kāshipuryām)、僅かな財産しかない男によって、自らの食物をもって、タガラシキン仏は (Tagaraśikhī) 供養された。(63)⁽⁴⁵⁾

クリキ王によって (Kṛkinarapatinā)、立派な輝く宝石が積み上げられたチャイトヤが

(caitye) 建立されたとき、彼の息子は、
功德ある習慣的行為をしていたが (punyaśīlah), 大きな善行に向けて (mahatkuśalāya),
宝石や黄金で美しい日傘を (ātapatram) 立てかけた。⁽⁴⁶⁾ (64)
(この) 二つの生の間に積んだ功德が大きく顕現することによって、他ならぬこの人は
偉大な称号のカーシュヤパたることを (Kāśyapatām) 得た。
黄金のターラ樹の如く (kanakatāla) 気高くそびえ立ち (labdhonnatih), 善根の果報であ
る (kuśalamūlaphalam), 光輝ある阿羅漢の状態と (arhatpadam) なったのである。」
(65)⁽⁴⁷⁾

略語表

赤沼: 赤沼智善『印度仏教固有名詞辞典』

Ap: The Apadāna, edited by Mary E. Lilley, Oxford: PTS, 2000.

Malalasekera: G. P. Malalasekera, *Dictionary of Pāli Proper Names*, London: PTS, 1974.

ThagA: Paramattha-dīpanī. Theragāthā-Aṭṭhakathā of Dhammapāliacārya, edited by F. L. Woodward,
vol. 3, London: PTS, (1959) 1984.

注

- (1) 韻律は Rathoddhatā.
- (2) 『有部苾芻尼』(908b) は、摩揭陀国に、尼拘律という名の大城があり、そこに尼拘律という名の大婆羅門が住んでいたと記す。『大迦葉』(760a) は、王舎城に尼拘類という名の梵子がいたと記す。『増一』(647b) は、羅閱城内に迦毘羅という大金持ちが住んでいたと記す。『釈迦氏譜』(93b) は、憍羅国に住むバラモン、迦葉と記す。『仏本行経』(81c) は、「菓樹生」という名前の大姓子と記す。『本行集経』(861c) では、摩訶娑陀羅の村に「尼拘慮陀褐羯波」という富裕なバラモンが住んでいたとある。『毘尼母経』(803c) は、王舎城にいる尼駒陀バラモンと記す。
- (3) ここより第8偈までの韻律は Śloka.
- (4) 『有部苾芻尼』(908b-909a) によると、息子がいなかった父は、畢鉢羅樹に息子を授けるようお願い、もし願いを聞き届けられれば供養し、反対に届けなければ伐採すると脅す。恐れた天神は毘沙門のところに行き、さらに毘沙門は帝釈天に行き、天神の窮状を伝える。その時天子の一人が五衰相を現じていて、今にも人間界に生まれようとしていた。このとき生まれた息子は、この樹から因んだ名、「畢鉢羅」である。また、氏族の名前から「迦楳波」とも言う。『因果経』(653a) は、憍羅厥叉国にいる「迦葉バラモン」とする。『大迦葉』(760a) は、「畢撥学志」とする。『増一』(647b) は「比波羅耶檀那」と記す。『本行集経』(861c) は、畢鉢羅樹の下で童子を産み、その樹の上に妙なる天衣が現れたのを見た両親は彼の童子の福德のせいに違いないと考えて、「畢鉢羅耶那」と命名したとあり、サンスクリットのテクストとほぼ同じ内容である。『毘尼母経』(803c) は、「畢波羅延」と記す。
- (5) 『有部苾芻尼』(909a) は、「習学技芸及諸典籍」とあり、4 薛陀を学んだとする。その割注に薛陀は明智と訳すとあり、原文の vidyā は「ヴェーダ聖典」の可能性もある。『因果経』(653a) によると、彼は三十二相を具え、智慧あり、4 ヴェーダ (毘陀経) や一切の書

- 論を誦し、すべてに通達していた。『釈迦氏譜』(93b)も、三十二相を具え、書論に通じていたと記す。『本行集経』(862a)では、童子は8歳になると、バラモンの戒を受け、様々な技芸、祭祀法式、4韋陀などを学ぶとある。『毘尼母経』(803c)は単に経書に熟達し、大人の相ありとする。
- (6) 『有部苾芻尼』(909b)では、迦提波にとって世間の欲楽は彼の願う所ではなく(世間欲楽、非我所願)、隠遁を願えば、その精神は上昇して究竟の所に赴くと古の仙論があると(古仙論曰。楽隠遁者、其神清昇、至究竟处。)彼は父に言う。『釈迦譜』(93b)は、彼も妻ともども世欲になく、家を捨てて入山したと記す。
- (7) 『有部苾芻尼』(909b)では、父は息子に、家業を継ぎ、祖霊を敬い、跡継ぎを断たないようにするのが勤めだ(夫為人子、須紹家業。敬事祖禰、無令絶嗣。)と諭す。『本行集経』(862b)にも、父が、跡継ぎがいなければ人は天上に生まれ変われないと子供に諭す。
- (8) 『本行集経』(862b)にも同様な表現(波波摩摩。我心不樂、娶妻畜婦。我意願樂、欲修梵行。)がある。
- (9) 韻律は Mandākrāntā。
- (10) 韻律は Śārdūlavikrīḍitam。
- (11) ここから第24偈までの韻律は Śloka。
- (12) 『有部苾芻尼』(909b)も同様の表現「若得如此女人、我当随教、共為婚匹。」を記す。『本行集経』(862b)でも、息子は黄金でできた婦女の形に似た女性を求めて欲しいという注文を両親に出す。
- (13) 『有部苾芻尼』(909b)では、父はそのような女性は得がたいと悲嘆して、頬杖をつき、溜め息をついた、とある。
- (14) 『有部苾芻尼』(909b)は「諸学徒」とする。『本行集経』(862b)は彼の家にいて「門師」の役割をしているバラモンとする。
- (15) 原文の読みは *vigatānandanispandaṃ* であるが、今ひとつ意味がはっきりしない。ここでは *vigatānandaṃ nispaṇḍaṃ* と読んだ。
- (16) 『有部苾芻尼』(909b)では、諸学徒は、都合4個の黄金の乙女の像を作って、四方に、その像に匹敵するような乙女を見つけに行ったとある。
- (17) 『有部苾芻尼』(909b-c)では、学徒は黄金の像を持って、それを「金神」と言い、鼓を鳴らし、螺を吹き、盛んに供養し、さらに女性たちにこの天神を供養すれば、この神は5種の大願を叶えると説く。即ち、富貴の家に生まれ、貴族に嫁し、夫に軽んじられることなく、徳ある子を産み、夫は常に女性の意に従う。『本行集経』(863a)は、この神明を供養すれば、女性が心に願うことが叶う(汝等女輩、各当供養、此之神明。若有女能供養於此神明之者、其女所可、有心求願、即得成就。)と記す。
- (18) 『増一』(647b)は、妻の名を「婆陀」と記す。『有部苾芻尼』(909b-c)は、劫比羅城に住む、劫比羅という名前のバラモンの娘「妙賢」と記す。『本行集経』(863a)では、毘耶離城から程近い所に、迦羅毘迦という名の大きな村があり、そこに富裕な色迦毘羅という名のバラモンが住んでいた。彼の娘に「跋陀羅迦卑梨耶」という名の端正な女性がいたとある。『毘尼母経』(803c)は「跋陀」という。
- (19) 『本行集経』(863b)も、娘は父に梵行を修するのに専念している(我心中欲修行梵行。)と記す。
- (20) 『本行集経』(863c)では、娘の親が客人のバラモンに、「娘が嫁ぐ時には多くの錢財を求めますが、誰が娶ることが出来るか。」と尋ね、客人のバラモンがどの程度かと聞くと、この人形ほどの黄金と答えている。

- (21) テクストの読みは *kapilam* であるが、今ひとつ文法的にはっきりとしない。ここでは *kapilām* と読んだ。
- (22) 韻律は *Vasantatilākā*。
- (23) ここから第62偈までの韻律は *Śloka*。
- (24) 『本行集経』(864c) では、両親に「自分で行け」と命じられた息子は、乞食をしながら迦卑羅迦村に行ったとある。
- (25) 『本行集経』(864c) では、迦卑羅迦村の習慣では、乞食者が来れば、女性は自身の手で食物を運び、外で彼に布施するとある。
- (26) 『有部苾芻尼』(910a) では、新郎は、結婚式の日に新婦の手をとる以外、その日以降は、絶対に身体に触れないという誓いをたてたとある。『本行集経』(865a) も、息子の言葉として「我実不用，行於五欲。我今内心，願行梵行。」と記す。
- (27) 原文の読みは *-brahmacaryoru-* だが、意味がとりにくい。おそらく韻律の関係で、*-brahmacaryayor* の読みがこのようになったのではなかろうか。『有部苾芻尼』(910b) は、「共厭世事，専求出道。曾無一念，起染欲心。」と記す。
- (28) 『本行集経』(865a-b) に、「若畢鉢羅耶，著於睡眠，其跋陀羅女，即起經行。若跋陀羅女，著於睡眠，其畢鉢羅耶，即復經行。如是更互，周歷年載，終不同寢。」と同様な表現がある。
- (29) 『有部苾芻尼』(910b) は、天帝釈が迦提波の解脱を求める心を試すために、自ら蛇を化作したと記す。
- (30) 『本行集経』(865b) は「即衣裏手，擊跋陀羅臂安床上。」と記す。『有部苾芻尼』(910b) は「将宝扇柄，拳手置床」と記す。
- (31) 『本行集経』(865b) は「恐畏彼蛇，吐毒螫汝。我於彼時，以衣裏手，擊持汝臂，安置床上。」と記す。
- (32) この意味は今ひとつはっきりとしない。
- (33) 原文の読みは *rāgoragāt* であるが、おそらく *rāga uragāt* が再度サンディしたのであろう。
- (34) 『有部苾芻尼』(910b) は、「寧使我身遭毒蛇 慎勿虧誓来相触 蛇毒但一身死 染毒滄没無辺際」と記す。
- (35) ここでは *sambhāra*, *bhāra* という音の連続が認められる。
- (36) 『本行集経』(865c) も烏麻油を搾って、瓶の中に入れておくと、その中に多くの虫が入って死んでいくのを見て、その過失が自らに属すものだという使女らの言葉を聞き、彼女たちに油を絞ることをやめさせたとある。ThagA p. 132では、バッダー・カピラーニーが、胡麻の虫が (*tilapāṇake*) 鳥によってついでまれているのを見、その罪が (*akusalam*) 自らに帰せられると聞いて出家を決意した、とある。
- (37) 『本行集経』(865c) では、彼が田地の検校に出かけると、牛が使われて一時も休ませてもらえないのを見て、憂い悲しんだとある。『有部苾芻尼』(910c) には、「觀此耕犁処 損地害諸虫 牛力復勤勞 愍念如親屬 農夫苦憔悴 風日損形容 作務倦耕耘 見此心酸楚」と述べ、迦提波は耕夫や牛畜を解放したとある。
- (38) ThagA p. 132では、畑の一面で (*khetta-kotīyam*)、鋤で掘り起こされた土から、ミミズなどの虫たちが鳥などの鳥によってついでまれているのを見て、出家を決意したとある。また、『因果経』(653a) では、過去世に善根を種えたために、家に在って五欲の樂を樂しまず、日夜思惟して、世間を厭離し、精勤して出家の法を求めたとある。
- (39) 『本行集経』(866a) も、大迦葉という種姓の出自であるから迦葉と名づけられたとする。『有部苾芻尼』(909a) も、氏族の名から迦提波というたと記す。さらに同経 (911a) では、

- 出家した彼を人々は「隠士」と呼んだとある。『仏所行讚』(33c)も、迦葉族の明灯という表現を記す。
- (40) 『因果経』(653b)では、迦葉は大威徳あり、智慧聡明であるから、「大迦葉」という名がついたとある。『増一』(647c)では、大迦葉は仏陀の弟子中、頭陀第一とある。『釈迦氏譜』(93b)では、天人の重んじる所であるが故に、「大」の字を冠するとある。『仏所行讚』(34a)は、大徳普く流れ聞こえるから「大迦葉」と名づけると記す。
- (41) その時の仏は、『因果経』(653a)では「薩婆悉達」、「釈迦牟尼仏」とあり、『本行集経』(866b)や『大迦葉』(760a)では単に「世尊」とのみあり、『増一』(93b)では竹園にいる仏とある。
- (42) 『本行集経』(866a)は「多子」と呼ばれる神が住む、神祇処、あるいは「多子樹」(866b)と記す。『大迦葉』(760a)は「多子神祠」と記す。そこには叢樹があるとされているので、神祠とは多くの樹木がある場所であることが分かる。『仏本行経』(81c)は、「多子野沢」という場所で仏の弟子となり、深妙の法を聞いて、果証を得たと記す。『有部苾芻尼』(911a)は「多子制底」の辺りと記す。『仏所行讚』(33c)も、「多子塔」で釈迦文と出会い、弟子となったと記す。『毘尼母経』(804a)では、仏の神力によって、畢波羅延が多子塔に向かいたいという気持ちを起こさせた(自然生心、欲向多子塔、)とある。
- (43) 『大迦葉』(760a)は、世尊は大法輪を転じたとする。『毘尼母経』(804a)では、仏が童子のために種々の因縁をもって巧みに諸法を説くと、童子は須陀洹果を得る。その後童子は仏の説いた法を七日七夜繫念して、八日目の朝に阿羅漢果を得た、とある。
- (44) 『因果経』(653b)は、阿羅漢果を得たとする。
- (45) この偈と次の第64偈の韻律は Puṣitāgrā。この前世譚は『本行集経』(868a-b)にも認められる。そこでは、辟支仏の多伽羅尸棄が、波羅捺城にて托鉢していた時の話。穀物が実らず大勢の人が死に(穀貴飢餓、白骨滿地、人民多死。)、托鉢が困難な時(乞食難得。)、一人の貧しい人が辟支仏を招きいれ、食事の布施をし、来世にて説法を聞いて直ちに悟りを開く(願得聞持、速疾解悟。)か、悪道に堕ちないように願をたてたとある。
- (46) 『本行集経』(866c)にも同様の記述がある。迦葉仏のとき、迦尸国王の訖利尸子はこの仏を供養した。仏が般涅槃に入ると、仏舍利のために七宝の塔を建立した。彼の王子、奢婆陵伽はその塔の上に七宝の蓋を造り、その塔の上を覆った。
- (47) 韻律は Vasantatilakā。

